朝飯

島崎藤村

五月が来た。測候所の技手なぞをして居るものは誰しも同じ思であろうが、殊に自分はこの五月を堪えがたく思う。其日々々の勤務（つとめ）——気圧を調べるとか、風力を計るとか、雲形を観察するとか、または東京の気象台へ宛てて報告を作るとか、そんな仕事に追われて、月日を送るという境涯でも、あの蛙が旅情をそそるように鳴出す頃になると、妙に寂しい思想（かんがえ）を起す。旅だ——五月が自分に教えるのである。

いろいろなことを憶出すのもこの月だ。

ある日のことであった。丁度自分の休暇に当ったので、事務の引続を当番の同僚に頼むつもりで書いて置

いた気圧の表を念の為に読んで見た。天気、晴。気温、上昇。雲形、層、層積、巻層（けんそう）、巻積。よし。それで自分は小高い山の上にある長野の測候所を出た。善光寺から七八町向うの質屋の壁は白く日をうけた。庭の内も今は草木の盛な時で、柱に倚凭（よりかゝ）って眺めると、新緑の香に圧されるような心地がする。熱い空気に蒸される林檎の可憐らしい花、その周囲を飛ぶ蜜蜂の楽しい羽音、すべて、見るもの聞くものは回想（おもいで）のなかだちであったのである。其時自分は目を細くして幾度となく若葉の臭を嗅いで、寂しいとも心細いとも名のつけようのない——まあ病人のように弱い気分になった。半

生の間の歓（うれ）しいや哀しいが胸の中に浮んで来た。あの長い漂泊の苦痛（くるしみ）を考えると、よく自分のようなものが斯うして今日まで生きながらえて来たと思われる位。破船――というより外に自分の生涯を譬える言葉は見当らない。それがこの山の上の港へ漂い着いて、世離れた測候所の技手をして、雲の形を眺めて暮す身になろうなどとは、実に自分ながら思いもよらない変遷（うつりかわり）なのである。

　こう思い耽って居ると、誰か表の方で呼ぶような声がする。何の気なしに自分は出て見た。

　旅窶（たびやつ）れのした書生体の男が自分の前に立った。片隅

へ身を寄せて、上り框（がまち）のところへ手をつき乍ら、何か低い声で物を言出した時は、自分は直にその男の用事を看（み）て取った。聞いて見ると越後の方から出て来たもので、都にある親戚をたよりに尋ねて行くという。はるばるの長旅、ここまでは辿り着いたが、途中で煩（わずら）った為に限りある路銀を費い尽して了った。道は遠し懐中（ふところ）には一文も無し、足は斯の通り脚気で腫れて歩行も自由には出来かねる。情があらば助力して呉れ。頼む。斯う真実を顔にあらわして嘆願するのであった。

「実は――まだ朝飯も食べませんような次第で。」

と、その男は附加（つけた）して言った。

この「朝飯も食べません」が自分の心を動かした。顔をあげて拝むような目付をしたその男の有様は、と見ると、体躯（からだ）の割に頭の大きな、下顎（おとがい）の円く長い、何となく人の好さそうな人物。日に焼けて、茶色になって、汗のすこし流れた其痛々敷（いたいたし）い額の上には、たしかに落魄という烙印（やきがね）が押しあててあった。悲しい追憶（おもいで）の情は、其時、自分の胸を突いて湧き上って来た。自分も矢張その男と同じように、饑と疲労（つかれ）とで慄えたことを思出した。目的（あてど）もなく彷徨（さまよ）い歩いたことを思出した。恥を忘れて人の家の門に立った時は、思わず涙が頰をつたって流れたことを思出した。

「まあ君、そこへ腰掛けたまえ。」

と、自分は馴々敷(なれなれし)い調子で言った。男は自分の思惑を憚るかして、妙な顔して、ただもう悄然(しょんぼり)と震え乍ら立って居る。

「何しろ其は御困りでしょう。」と自分は言葉をつづけた。「僕の家では、君、斯ういう規則にして居る。何かしら為て来ない人には、決して物を上げないということにして居る。だって君、左様じゃないか。僕だって働かずには生きて居られないじゃないか。その汗を流して手に入れたものを、ただで他(ひと)に上げるということは出来ない。貰う方の人から言っても、ただ物を貰

うという法はなかろう。」
　こう言い乍ら、自分は十銭銀貨一つ取出して、それを男の前に置いて、
「僕の家ばかりじゃない、何処の家へ行っても左様だろうと思うんだ。ただ呉れろと言われて快く出すものは無い。是から君が東京迄も行こうというのに、そんな方法(やりかた)で旅が出来るものか。だからさ、それを僕が君に忠告してやる。何か為(し)て、働いて、それから頼むという気を起したらば奈何(どう)かね。」
「はい。」と、男は額に手を宛てた。
「こんなことを言ったら、妙な人だと君は思うかも知

れないが――」と自分は学生生活もしたらしい男の手を眺めて、「僕も君等の時代には、随分困ったことがある――そりゃあもう、辛い目に出遇ったことがある。丁度君が今日の境遇を僕も通り越して来たものさ。さもなければ、君、誰がこんな忠告なぞするものか、実際君の苦しい有様を見ると、僕は大に同情を寄せる。まあ僕は哭（な）きたいような気が起る。真実（ほんとう）に苦しんで見たものでなければ、苦しんで居る人の心地（こころもち）は解らないからね。そこだ。もし君が僕の言うことを聞く気があるなら、一つ働いて通る量見になりたまえ。何か君は出来ることがあるだろう――まあ、歌を唄うとか、

御経を唱（あ）げるとか、または尺八を吹くとかサ。」
「どうも是という芸は御座いませんが、尺八ならすこしひねくったことも――」と、男は寂しそうに笑い乍ら答えた。
「むむ、尺八が吹けるね。それ見給え、そういう芸があるなら売るが可（い）じゃないか。売るべし。売るべし。無くてさえ売ろうという今の世の中に、有っても隠して持ってるなんて、そんな君のような人があるものか。では斯うするさ――僕が今、君に尺八を買うだけの金を上げるから粗末な竹でも何でもいい、一本手に入れて、それを吹いて、それから旅をする、ということに

したまえ——兎に角これだけあったら譲って呉れるだろう——それ十銭上げる。」

斯う言って、そこに出した銀貨を男の手に握らせた。

「人の一生というものは、君、どうなるか解らない。」と自分は男の顔を熟視(みまも)り乍ら言った。「これから将来(さき)、君がどんな出世をするかも知れない。僕がまた今日の君のように困らないとも限らない。まあ、君、左様(そう)じゃないか。もし君が壮大(おおき)な邸宅(やしき)でも構えるという時代に、僕が困って行くようなことがあったら、其時は君、宜敷頼みますぜ。」

「へへへへへ。」と男は苦笑(にがわら)いをした。

「いいかね。僕の言ったことを君は守らんければ不可(いかん)よ。尺八を買わないうちに食って了っては不可(いかん)よ。」

「はい食(た)べません、食べません——決して、食べません。」

と、男は言葉に力を入れて、堅く堅く誓うように答えた。

やがて男は元気づいて出て行った。施与(ほどこし)ということは妙なもので、施(ほどこ)された人も幸福(しあわせ)ではあろうが、施した当人の方は尚更心嬉しい。自分は饑えた人を捉(つかま)えて、説法を聞かせたとも気付かなかった。十銭呉れてやった上に、助言もしてやった。まあ、二つ恵んでやっ

た。と考えて、自分のしたことを二倍にして喜んだ。
五月――寂しい旅情は僅かに斯ういうことで慰められたのである。
しばらくして、水汲みから帰って来た下女に聞くと、その男は自分の家を出ると直に一膳めしの看板をかけた飲食店へ入ったという。其時自分は男の言葉を思出して、「まだ朝飯も食べません。」と、繰返して笑った。定めし男の方でも自分の言葉を思出して「説法は有難いが、朝飯の方が尚有難い。」とかなんとか独語(ひとりごと)を言い乍ら、其日の糧(かて)にありついたことであろう。

（一九〇六年一月「芸苑」）

底本：「日本プロレタリア文学大系（序）」三一書房
1955（昭和30）年3月31日初版発行
1961（昭和36）年6月20日第2刷
入力：Nana ohbe
校正：林　幸雄
ファイル作成：野口英司
2001年12月17日公開
2001年12月31日修正
青空文庫ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。